

アメリカザリガニは、現在では北海道の一部を含む日本全国に分布し、教科書にも掲載されている水辺の生きものの代表のような生物です。しかし、その名のとおりアメリカザリガニは、れっきとした外来生物です。1927年にアメリカからウシガエルと共に、その餌として20匹程度が日本に持ち込まれたとされています。それではアメリカザリガニの何が問題なのでしょう？



アメリカザリガニ【緊急対策外来種】

水辺の生きものが絶滅？

アメリカザリガニは雑食性で、昆虫やオタマジャクシ、水草など、水辺や水中のものを何でも食べてしまいます。一度アメリカザリガニが侵入すると、その後数年のうちに、それまで生育・生息していた水草や水生昆虫の多くが全滅してしまうとされています。

田んぼに悪さ

アメリカザリガニは稲の苗を食べたり、水田の畦に穴を空けたりします。また、それを防ぐために農薬が使用されると、さらに別の生きものが死んでしまいます。



アメリカザリガニの卵巣。条件がよいと、年に二回、数百個の卵を産む

駆除は大変

アメリカザリガニの駆除は容易なことではありません。千葉県生物多様性センターでも、絶滅危惧種の保護のためにアメリカザリガニの根絶を行った場所があり、月に2回以上の駆除作業を行い、約3年の時間と労力をかけて根絶しました。放流は簡単でも、駆除は大変なのです。

千葉にはいないニホンザリガニ

しばしば茶色っぽいアメリカザリガニが、在来種のニホンザリガニと誤認されることがあります。ニホンザリガニは、青森県から北海道に生息する種類で、関東地方にはもともと生息していません。



アメリカザリガニの子ども。エビやニホンザリガニと間違われることが多い

軽視されがちな被害

これほど深刻な被害をもたらしているにもかかわらず、アメリカザリガニは家庭や学校で気軽に飼われ、気軽に野外に逃がされ、現在でも生息域がひろがり続けています。放流などはもちろんのこと、ビオトープに導入することもやめましょう。千葉県では、ポスターやチラシを作成して注意を促しています。



アメリカザリガニは、もともと日本にはいなかった生きもので、「外来生物」と呼ばれます。



水生昆虫や水草など、なんでもよく食べるので、生態系に大きな被害をあたえます。



絶滅しそうな生きもの（絶滅危惧種）を守るためには、ザリガニの侵入を防がなければなりません。

アメリカザリガニを外に逃がさないで！



※アメリカザリガニは環境省によって緊急対策外来種に指定されています。
また、日本生態学会によって日本の侵略的外来種フースト100にも選定されています。

千葉県生物多様性センター
〒260-0802 千葉市中区東倉庫町 955-2 (国立中央博物館内)
Tel: 043-260-9661 / Fax: 043-260-9615 (土曜日は休館)

注意を呼びかけるチラシ

千葉県では、ペットとして輸入された外来生物カミツキガメが印旛沼周辺で野生化して増えてきていることが、専門家の調査でわかっています。外来生物に対しては、どのような対策がおこなわれるのか、このカミツキガメを例にご紹介しましょう。

子どもにケガも

カミツキガメは大型に成長し、大量の魚、エビ、カエルなどを食べてしまいます。漁師の漁網に入り、中にいる魚やエビなどを食べてしまう被害も発生しています。また、子どもがさわって指を怪我したという事例もあります。



カミツキガメ【特定外来生物】

対策はワナと市民の通報

そこで千葉県では、国と協力し、先進的な取り組みとして、平成19年度から、ワナを使った捕獲事業（防除）を、カミツキガメの産卵が確認されている地域



から開始しました。また、市民の皆様から「カミツキガメがいた!」という通報があった場合は、市町村や警察などが収容したあと、千葉県生物多様性センターで、捕獲情報の集約を行っています。



多くの人々の労力が

これまでの防除の継続により、わなによる捕獲で3,575頭、市町村や警察による回収で1,093頭、合計で4,668頭のカミツキガメが駆除されました（平成28年1月末現在）。

わなによる捕獲では、これから産卵する大きな個体しか捕獲できないこともあり、すべてを取りつくすまでには、長い時間がかかります。カミツキガメは外国から輸入され、ペット

として飼われていたものが、飼いきれなくなって捨てられ、野外で増えたと考えられています。捨てた人の無責任な行為により、カミツキガメのためだけに毎年、市民、自治体の職員、警察官などの多大な労力が使われています。

ペットは最期まで面倒をみよう！

右の写真は殺処分されたカミツキガメたちです。この姿をどう思いますか？

これから先、このような行為が行われないようにするには、ただひとつ、「ペットは最期まで面倒をみること」につきます。

ペットは買う前によく考え、飼い始めたら最期まで飼うことにより、このような不幸が繰り返されないようにしていきましょう。



見えない絶滅

もともといる生きもの（在来種）と交雑（雑種をつくること）してしまうような外来生物がきた場合、見かけでは在来種の個体数が減少していなくても、絶滅が起こることがあります。千葉県ではニホンザルとアカゲザルとの間で、こうした問題が起きています。



ニホンザル（撮影：池田文隆）

昔からいたニホンザル

房総半島では、古来より房総の自然環境下に適応したニホンザルが暮らしています。この「房総のサル」は、地理的に他の地域から孤立しており、形が小型で、遺伝子構成にも固有性があることが知られています。

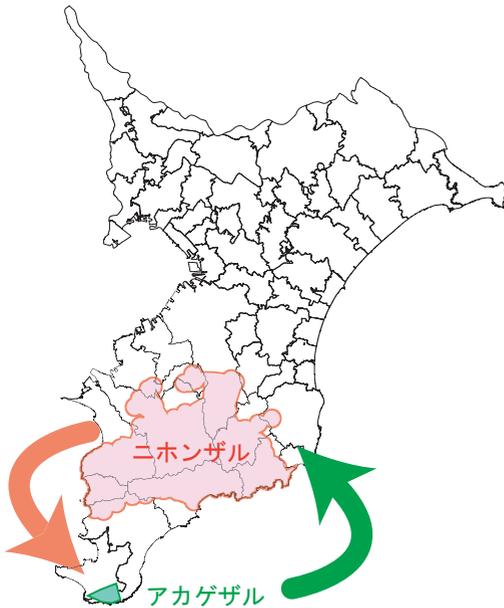
アカゲザルとの交雑

しかし、近年、房総半島では主に半島南端の白浜地域を中心にアジア大陸東部原産のアカゲザルが野生化しており、ニホンザルとの交雑が問題となっています。大陸から持ち込まれた外来生物であるアカゲザルとニホンザルが交雑することで、房総のニホンザルが雑種化し、絶滅してしまう可能性があるのです。



アカゲザル【特定外来生物】（撮影：池田文隆）

雑種化したサルは、もはやニホンザルではありません。実際に、ニホンザルの群れがいる場所で、アカゲザルが捕獲されたり、交雑した個体が確認されており、事態の緊急性は極めて高いといえます。



ニホンザルとアカゲザルの分布域。
離れザルが行き来している

野生生物の遺伝的固有性は、長い時間をかけて、別々の場所で進化してきたものです。人間が勝手に生物を移動させて、地域の生きものの固有の遺伝子を乱すようなことをしてはいけません。

目に見えない絶滅へ

交雑による絶滅は、目に見える形で生きものの数が減っていくわけではないため、絶滅の危険性を実感することができず、気付いたときには手遅れ、ということが起こりやすいため大変危険です。最近ではDNA鑑定
の進歩によって、このような交雑の進行度合を検知できるようになりました。



ニホンザル (撮影：池田文隆)

ハリエンジュ（ニセアカシア）

かつては、緑化の目的を果たせばいいということで、さまざまな植物が外来・在来の区別なく植栽されたことがあります。たとえば、日本では戦争で荒廃した国土に緑を呼び戻そうと各地に北米原産のハリエンジュ（別名ニセアカシア）が植栽されました。

ハリエンジュは、やせた土地でも育つことができます。さらに、根から新しい芽が出てくるので一本のハリエンジュのまわりに「たけのこ」のようにたくさんハリエンジュが発生し、広がっていきます。

確かにハリエンジュは、荒廃した国土を緑に変えることに大きな役割を果たしました。しかし、人の意図に関係なくチャンスがあれば絶えず増えようとするのが生きものです。気がつくと、河原などにもハリエンジュが生え始め、在来の植物を追いやり、手が付けられないほどに増えてしまいました（下の写真）。現在、ハリエンジュは産業管理外来種に指定されるほどはびこっています。



荒川の中州に侵入したハリエンジュ【産業管理外来種】（撮影：福田真由子）

クズ：アメリカでは外来生物

アメリカではダムなどを造ったときにできる斜面の土を固定するために日本のクズがさかんに植えられました。飼料にもなるため、政府により栽培が奨励されるほどでした。クズは元気よく増え続け、あっという間に斜面を覆ってしまったので土の流出が止まり、初めは喜ばれましたが、クズは植林地や道路際の木立を覆い、電柱にも巻きつき、生えてほしくないところにも大いに広がってしまいました。今では駆除に莫大な費用がかかる嫌われ者になっています。



植物に罪はない

ハリエンジュもクズも、植物自体には罪はありません。生きられるところがあれば生き続け、少しでも子孫を増やそうとするのはどの生きものも同じです。それなのに、人間の都合で、褒めたたえたとせば、今度は悪者扱いをする。これはあまりに身勝手ではないでしょうか。

植える前によく調べよう

今ではむやみに外国の植物を緑化に使うことは減ってきました。それでも、植物を良く知らないために、在来生物だと思い込んで外来生物を植えてしまうことや、在来生物に良く似た外来生物が紛れ込んで植えられていることが今でも起きています。植物を植える前には図鑑などでよく調べたり、専門家に聞いてから判断しないと、取り返しのつかないことになってしまいます。



庭から逃げだした重点対策外来種ツルニチニチソウ

猛烈な勢いで繁殖

西日本で爆発的に広がった特定外来生物ナルトサワギクとの闘いが、千葉県でもくり広げられています。ナルトサワギクはマダガスカル原産の植物で、日本には緑化植物の種子に混じって入ったようです。海岸や造成地などの日当たりのよい裸地では猛烈な勢いで繁殖し、一面黄色になってしまいます。



一面のナルトサワギク【特定外来生物】
(館山市)

家畜が食べると
中毒をおこします



特定外来生物
ナルトサワギク：実物大

館山1-015 千葉県自然生物多様性センター043-265-3601まで

注意を呼びかけるチラシ

ウシが死ぬ

ナルトサワギクの恐ろしい点は、ピロリジジンアルカロイドという毒を含んでいるためウシやヒツジなどの家畜が食べた場合、乳の出が悪くなるなどの影響が出て、最悪の場合は家畜が死んでしまうことです。オーストラリアの研究者による1993年の研究によれば、同国ではナルトサワギクのために年間200万ドルの損害が生じています。ブラジルでは、ナルトサワギクを大量に食べた乳牛が死亡した事例もありました。

みんなで協力しての闘い

現在、館山市と南房総市で活動する自然研究団体が中心となり、市役所や千葉県生物多様性センターも協力して、防除作戦が展開されています。100名以上の市民が参加して何度も行われた「駆除大会」は大きな成果をあげましたが、まだ根絶するには至っていません。



「駆除大会」に集まった人々

てごわいナルトサワギク

ナルトサワギクは、一株でも残っていれば冬でも生長し、一年中花をつけて種子を飛ばします。引き抜いたあとの地面からも、どんどん新しい芽がでてきます。私たちも、ただ引き抜いているだけではいずれ根負けしてしまいそうです。ナルトサワギクの性質を研究し、除草シートをつかう、農薬を撒くといった、別な方法も検討しなければなりません。



一度抜いたあとの芽生え



飛ぶ寸前の種子